

『三溪画集』の解説にあたって

発表者：藤嶋会員・高橋会員

『三溪画集』は三溪が描いた絵画をカラー印刷で収録し、全4輯全6巻で出版されました。当研究会としてこれを調査するために画像を撮影し、画題や画讃と合わせて、猿渡顧問、藤嶋会員、高橋会員が整理を進めてきました。今回はその中から、第1輯第1巻について報告がありました。



画像を確認しながら藤嶋会員による解説を聞きました

まずは画像を1点ずつ確認しました。被写体となった三溪画集が古びているため黄色がかった見える画像もありましたが、花鳥や風景を描いた掛軸や卷子が多いことが確認できました。画讃は、『三溪帖』にも掲載されている三溪自作の七言絶句や、タゴールがベンガル語で書いたものなどがありました。収録された作品の原本が現在は三溪園所蔵のものもことから、さらなる解説が期待されます。

原三溪旧蔵品東大寺三月堂（法華堂） 不空羼索観音像持物《蓮華》について

発表者：南屋会員

東京国立博物館で6月4日まで開催された「茶の湯」展に、原三溪旧蔵の《蓮華（東大寺三月堂不空羼索観音持物）》が出品されました。それはまさに、三溪園の蓮華院に飾られていたと伝わるものです。

当研究会では2013年5月に「三溪園『蓮華院』と不空羼索観音『蓮華』との謎を追って」と題して広島会員から発表がありましたが、三溪が入手した蓮華と、東大寺の不空羼索観音が現在手に持っている蓮華が同じものかどうか謎のままです。今回は南屋会員から、文化財修理の観点から新しい仮説が提示されました。

日本美術院の修理事業として新納忠之介により、明治34年から36年にかけて東大寺の不空羼索観音立像が修理されました。東京国立博物館の古写真データベースに収録されている明治21～22年に撮影された不空羼索観音立像の写真によると、当時の持物は現在とはだいぶ異なります。特に蓮華は、現在は左第二手に持っていますが、当時は右第三手にあったように見えます。修理で新しい蓮華が新補され、古い蓮華は取り外されて古美術商を通して三溪の手に渡ったのであれば、三溪の蓮華入手時期と一致するのです。



思わず身を乗り出して発表に聞き入る会員たち